

巻頭言

問いの発見・共有と粘り強さ

吉水 裕也

2020年は、確実に社会科教科書に記録される年となりました。

COVID-19という感染症名には20の数字はありませんが、最初に大きな影響が出たのは確実に2020年だったと言うことになります。

今年度は、初等・中等教育機関のみならず、大学での教育研究活動にもその影響が大きく出ました。前期のオンライン授業では、教職員も学生も手探りで、LiveCampus, zoom, Teamsなどのツールを使って授業が実施されました。連休明けまで授業が開始できなかったため、特に新入生の方にはご心配とご迷惑をおかけすることになりました。幸いすぐにこれらのツールは使いこなせるようになったかと思えます。そして、対面であれ、オンラインであれ、大切なことは授業の中味だということは変わらないことがよくわかりました。

地理・地理教育研究室としても、夏に予定していた第2回沼島調査の実施を断念せざるを得ず、急遽フィールドを加東市周辺に変更して調査が実施されました。ゼミ単位で実施されていた恒例行事も中止することが多くなり、人と環境の関わりを大切にしつつ研究を進めてきた私たちにとっては、これまでとは異なる研究スタイルや教育のスタイルを強いられることとなりました。

一方、オンラインでの授業は様々な可能性を感じさせてくれた部分もあります。これまでは、何年かのうちに徐々に変わっていくのだろうと思っていたことが、一気に加速したことによって、オンラインでの学会なども空間を越えて開催できることがわかりました。私事ですが、12月にはオンラインではじめて外国の学会で発表するという経験もしました。また、徐々にこのウイルスに関する知見も蓄積されてきたため、対面での教育についての方法も工夫されていると思います。

どうすればよいのか、どうすれば上手くいくのか。具体的な問いを持つことができれば、知恵を出し合って工夫することができます。改めて、問いをもつこと、問いを共有することの大切さを感じています。しかし、共有できた問いは、なかなか解けない問いかもしれません。これまでは、その問いを解ききることが大切だと考えられてきましたが、正しいことが何か見えにくい現状からすると、解けない問いに粘り強く関わり続け、解けない状態に耐えることも大切です。

学問の基本姿勢ですね。粘り強く取り組みたいものです。